

〈1〉

灰色が、伸ばした指の先をかすめそうなほど低い空。網戸をすり抜けて濃い夏の気配が闖入する。

ここは古い戸建、一階和室。

和室。中央に座卓。部屋の隅に年季の入った仏壇。部屋のあちこちに段ボール。封はまだされていない。

育子、引越しの準備をしている。

育子、ふと手を止めて窓の方へ行き、網戸を開けて腕を外に伸ばしてみる。

育子、座卓の上のたばこを取り、ライターを探すが見当たらない。しばらく探すか、諦めて仏壇にあるチャッカマンでたばこに火をつける。

育子、仏壇のろうそくに火をともし、線香をあげる。

育子、窓のそばに腰をおろし、仏壇を眺めている。

仏壇には亡き夫の遺影がある。

育子、窓から腕を出し、しばらくそうしている。

育子、遺影にむかって、

育子　なあ。

遺影はまっすぐ育子にむいている。

育子　なんなん。

遺影の視線は育子の胸にまっすぐ伸びている。

育子　なんでそんな見てんの。

育子、伸ばしていた腕を引っ込めて、夫の視線にこたえるようにおっぱいを片方ぼろんと出してみる。

育子　はい。

遺影はただまっすぐ育子にむいている。

育子　なに。なんか言うことないの。なあ。なに見てんの。

育子、そのままの格好で遺影をじっと見る。

育子　入ってくるかな。ここまで。びしょびしょになるかな。
ここも。